



 Data	2023-125
監督: イム・スルレ	
出演: ファン・ジョンミン / ヒョン ビン / カン・ギヨン	
.....	
.....	
.....	
.....	
.....	
.....	

## 👁️👁️ みどころ

イスラエルへのロケット弾攻撃と地上侵攻を強行したハマスは現在、約 200 人の人質を取っているが、イスラエルによる大規模なガザ地区への地上戦の開始は秒読み。それが実行されると、人質たちの命は・・・？

2001 年の 9・11 同時多発テロは世界の秩序を大きく変えた。アフガニスタンでは、同年 12 月に親米のアフガニスタン・イスラム共和国が誕生したものの、タリバンは国土と政権の奪取を目指してテロ攻撃を続けていた。そんな状況下、2007 年 7 月、タリバンによる 23 名の韓国人拉致事件が発生！さあ、韓国政府はどうするの？

そんな社会問題を、エンタメ性と同時にトコトン追及するのが韓国映画。しかも、本作は女性監督による挑戦だからビックリ！私の目には 4 つの欠点があるが、それを差し引いても、本作の問題提起性とエンタメ性の高さに拍手！

———— \* ——— \* ——— \* ——— \* ——— \* ——— \* ——— \* ——— \* ——— \*

## ■□■さすか韓国！“すごい実話”に若手女性監督が挑戦！■□■

日本は平和憲法（憲法 9 条）を基本とする平和国家だから、軍隊を持たないことになっている。もっとも、そんな“建前”の下で自衛隊が生まれたうえ、2022 年 12 月には安保関連 3 文書を改訂し、防衛費の増額や敵基地攻撃能力の保有にまで踏み込んだから、今やその“矛盾”は明らかだ。しかし、朝鮮戦争が「停戦状態」のままにある韓国は、今なお戦時体制下にある国だから、徴兵制が敷かれているのは当然。また、国防のために保有している軍隊は、米国との固い同盟の下、必要に応じて海外派兵もしている。

2001 年 9 月 11 日に発生した米国における同時多発テロを契機として始まったアフガニスタン戦争では、韓国を含む国際的な“有志連合”の武力支援を受けた米国の“不朽の自由作戦”によって、アフガニスタンを支配していたタリバンの排除に成功。3 か月後の 2001

年12月には、米国主導による（？）アフガニスタン・イスラム共和国が成立した。ところが、その後も国内各地に潜伏、残存したタリバンは国土と政権の奪回を図ったため、アフガニスタン政府や国際治安支援部隊（略称 ISAF）に対する自爆テロを含むテロ攻撃が激化した。そんな状況下の2007年7月19日に起きたのが、タリバンによる韓国人拉致事件だ。これによって韓国人23名が拉致され、人質とされた。

2023年10月7日に始まったハマスによるイスラエルへの大量のロケット弾攻撃と、それに対するイスラエルの大規模反撃は世界的な注目を集めているが、10月23日の朝刊各紙は、約210名に上る人質のうち、米国籍の2人の人質が解放されたことを報じた。これは、イスラエルによるハマス絶滅に向けた地上戦の開始が秒読みを迎えている中、中東の国・カタールの仲介によるものと言われているが、もちろんその真偽は不明だ。地上戦が開始すれば多くの人質が犠牲になることは明らかだから、水面下では、各国の利害・思惑を絡めたギリギリの交渉が続けられているはずだ。

そんな時代状況下、韓国の若手女性監督イム・スルレが、2007年のタリバンによる韓国人拉致事件に焦点を当て、本作に挑戦！パンフレットにあるイム・スルレ監督インタビューによると、①「本作の映画化を決めたきっかけについて」の質問には「最初に提案を受けたとき、大衆映画に落とし込むのは難しい作品のように感じました。最終的には、「国民を救わなければならない」という根本的な使命を持った外交官という人物に焦点を当てて話を作っていこうと決意し、制作が始まりました。」と答え、②「本作の制作で一番苦労した点は？」の質問には「制度や国境が脅かされてはいけません。人間は基本的に、それを守る責任を負っています。尊厳、態度、責任……観客がそういう部分について共感できるポイントはどこなのか。その模索が非常に重要だと思いました。最も難しく、気を使った点ですね。」と答えている。平和国家日本で近時、『沈黙の艦隊』（23年）が映画化されたことに私は驚かされたが、韓国では若手の女性監督だって（？）こんな問題意識を持っていることにビックリするとともに拍手！

## ■主役はファン・ジョンミンとヒョンビンの人気俳優2人■

本作冒頭、1台のバスに乗った某キリスト教教会に属する韓国人23名が突然タリバンに拉致され、人質とされてしまうシークエンスが登場する。その報告を受けてアフガニスタンに乗り込むのは、①外交通商部企画調整室室長・交渉官のチョン・ジェホ（ファン・ジョンミン）と②国家情報院・工作員のパク・デシク（ヒョンビン）の2人だ。

韓国映画では、社会問題提起作でもエンタメ性を強調するべく、主人公に人気俳優を起用したうえ、パディものにするものが多い。さらに、要所要所に、笑いの味付けをするものが多い。『ハント』（22年）（『シネマ53』310頁）も、『コンフィデンシャル 国際共助捜査』（22年）（『シネマ53』315頁）もそうだった。また、アフリカの国ソマリアの首都モガディシュからの脱出を描いた『モガディシュ 脱出までの14日間』（21年）（『シネマ51』207頁）もそうだった。

本作も、そんな韓国映画の正道（系譜）どおり（？）、主役はファン・ジョンミンとヒョンビンという人気俳優の2人だ。私の評価では『コンフィデンシャル 共助』（17年）（『シネマ41』未掲載）と『コンフィデンシャル 国際共助捜査』において、韓国の刑事カン・ジンテ役のユ・ヘジンにお笑いの要素をタツプリ詰め込んだのは正解だが、北朝鮮の特殊捜査員リム・チョリュリョン役のヒョンビンにもそれを求めたのは失敗だった。そんな反省の上に（？）イム・スルレ監督は本作のジェホとデシクには笑いの要素を一切入れなかったが、それを補うため“準主役”として通訳のカシム（カン・ギヨン）を登場させ、コメディの部分は全面的にカシムの役割とさせている。

私の見る限り、イム・スルレ監督による2人の主役と1人の準主役というバランスはベスト。アフガニスタンのカルザイ大統領や外務大臣（イヤド・ハジャジ）が型通りの役柄で、型通りのセリフを喋るのは当然だし、後半になってから登場するアフガンの部族長や、タリバンの司令官（ファヒム・ファズリ）も型通りの役で、型通りのセリフを喋るのは当然だから、本作では、カシムによるお笑いのスパイスが非常にうまく効いている。そのさじ加減はあつぱれた。

## ■欠点その1 —23人の韓国人はなぜアフガンへ？■

2001年の9・11同時多発テロを受けて、米国と有志連合国によるアフガン戦争が起きる中、日本政府は当然、民間人のアフガンへの渡航を制限（禁止）した。その点は韓国も同じだったはずだ。しかるに、なぜ某キリスト教教会に属する民間人23人は1台のバスに現地のガイド1人を伴ってアフガンの地を移動しているの？スクリーン上で見る限り、この「〇〇教会御一行様」の目的は“布教”のようだが、もしそうなら、それはナンセンス。そもそも、この「〇〇教会御一行様」のバスツアーは韓国政府の渡航許可を得ているの？本作は最後までそれを明確にしないまま、2人の主役による人質解放の（サクセス）ストーリーに終始していくので、アレレ。それが本作の第1の大きな欠点だ。

現地に乗り込んだジェホが人質解放交渉をするについて、「彼らはボランティアとしてアフガンに来た」と真っ赤なウソの説明をするのは勝手だが、タリバンがこの「〇〇教会御一行様」を拉致し人質とするについて、23名1人1人の個人情報を把握していたのは当然だ。すると、本作後半の1つのハイライトになる、ジェホと部族長との話し合いが、そんな嘘を前提に一旦はスムーズに進み、翌日にその嘘がばれたことで、部族長が激怒するというストーリーは、そもそも成り立たないはずだ。

## ■欠点その2 —交渉官の権限は？それがサッパリ不明！■

本作に見る韓国の外交通商部は日本の外務省と同じもの。かつて小泉純一郎内閣の下で外務大臣に就いた田中眞紀子氏は、外務省のことを「伏魔殿」と呼んだ。田中眞紀子大臣の功罪はともかく、私が思うに、彼女の“真意”は外務省という巨大官庁の“閉鎖性”と“仲間意識”が問題だとアピールしたかったことにある。役人（組織）の閉鎖性、仲間意識は日本の他の官庁はもとより世界的に共通の問題点だが、それはそれとして止むを得な

い面もある。

本作での「外交通商部企画調整室室長・交渉官」というジェホの地位がどれくらい高いのかは知らないが、彼の上司には次官がおり、その上に外務大臣、更にその上に大統領がいるのは当然。そして、役所が“上位下達”の組織であることも当然だし、上司の決裁や了解なしに部下が独断専行することが絶対に許されないのは当然だ。

23 人の韓国人を拉致し、人質に取ったタリバン側のアフガン政府に対する要求は、「収監されているタリバンの釈放」だが、交渉期限はたった 24 時間。本作に見るように、急遽、交渉官のジェホがアフガンに飛び立ったのは当然だが、到着した時点で猶予時間は既に 4 時間しかない。そんな中、スクリーン上はジェホたちの車が交通渋滞に巻き込まれてしまう姿を映し出すが、こんな状態でジェホがアフガンに入って何の意味があるの？そもそも、韓国政府や外務省が交渉官たるジェホに与えた任務は一体何？本作では、それが全然明らかにされないのが大きな欠点だ。

たまたまタリバン側が交渉時間を 24 時間延長してくれたうえ、更に少しずつ延長してくれたのは幸いだが、そういう事態の中でも、韓国政府の人質解放のための具体的な交渉案は全然明らかにされないから、アレレ？アレレ？アフガン政府の外務大臣が「我々はタリバンとこの先も戦わなければなりません」と答えて、タリバンの収監者の釈放を拒否したのは当然だから、韓国政府は 23 名の民間韓国人の人質釈放に向けて如何なる提案をするの？本作は、それについての大統領→大臣→外務次官とジェホとの打ち合わせ（上位下達）の姿を全く見せないのが大きな欠点だ。

### ■□■なぜ帰国命令から一転、直接交渉に？それが第 3 の欠点■□■

ハマスの絶滅に向けたイスラエルは一刻も早いガザへの地上戦を目指しているが、アメリカが懸命に、それに時間的猶予を求めているのは、200 名を超える人質の解放交渉を進めたいからだ。しかし、人質解放の交渉期限中にハマスが武装反撃の体制を整えたり、イスラエル周辺のシリアやヒズボラ、さらにイラン等がハマス支援網の輪を広げ、イスラエル攻撃の準備を整えさせたのでは大いなる損失になる。

それと同じように、2007 年の韓国人拉致事件においても、アフガン政府が米国にタリバンへの空爆を要請したのは仕方ない。もちろん、これは現在のイスラエルと同じで、その攻撃に伴う多くの民間人や人質への犠牲は残念ながら折り込み済み。つまり、良くも悪くも「武力制圧という大目標のためには多少の犠牲は仕方がない」という発想だ。本作では、そもそもジェホが交渉官としてどんな権限を持ち、どんな交渉をするのかがわからないという欠点があったが、「米国による空爆」という方針がアフガン政府の方針として決まれば、もはや韓国の一外交官による韓国人人質 23 名の解放交渉という任務など吹っ飛んでしまうのは当然。そのため、何の成果も得られないままジェホに帰国命令が下ったのも当然だ。

ところが、本作ではそんな状況下でジェホが最後の手段として申し出た「タリバンとの直接交渉」の願いを、次官や外務大臣の頭越しに、大統領が直接決裁し、OK するとい

う事態になったから、ビックリ！これってホントのことなの？韓国人拉致事件では、韓国政府の中でこんなハチャメチャな意思決定がされていたの？これでは、次官も外務大臣も完全に顔を潰されたことになってしまう。また、そもそも、ジェホによるタリバンとの直接交渉でジェホは何を提案するの？その打ち合わせは韓国政府内でできているの？そもそも交渉官たるジェホの授權範囲は一体どこまでなの？アフガン政府の「タリバンの収監者の釈放を認めない」という方針は一貫しているのだから、ひょっとして、そこで人質解放について身代金の話をするのなら、あらかじめ韓国政府内での意思統一が必要不可欠だ。しかるに、本作ではその点の説明が全くないまま、アレレ、アレレ、タリバン司令官から「5000 万ドル」という解放金の提案がなされると、ジェホは「3000 万ドル・・・」と対案(?)を！ジェホはいつの間にそんな権限を授与されていたの？

## ■欠点その4 一交渉成立、人質解放の裏側は？■

本作でジェホ役を演じたファン・ジョンミンは、『国際市場で逢いましょう』(14 年)、『シネマ 36』58 頁)、『哭声／コクソン』(16 年)、『シネマ 39』195 頁)、『工作 黒金星と呼ばれた男』(18 年)、『シネマ 45』291 頁) 等で存在感ある演技を見せた、韓国を代表する俳優だ。そのファン・ジョンミンが、まさに「極限境界線」上で、交渉官として、ある時には上司に逆らってまでも、ギリギリの努力を続ける姿は感動的だ。あえて防弾チョッキを脱ぎ、単身でタリバンの本拠地に入り、「答えを持ってきたか？」と問うタリバンの司令官に向かって、「タリバンの収監者の釈放はない！」と従前の主張を言い放つ姿も感動的だ。それを聞いた通訳のカシムが、「そんなことを通訳したら殺される」と恐れおののいたのは当然だが、なぜジェホは、あえてそんな“ゼロ回答”の強い姿勢を貫いたの？

私の推察では、米軍の空爆を回避したいタリバンの本音は、人質の解放金として韓国政府からいくら取れるかの計算をしていたものと考えられる。しかし、スクリーン上では、人質の解放金の話がほんの一言、二言交わされるものの、イム・スルレ監督は本作でジェホとタリバン司令官との間で展開される直接交渉において、その点を明確にしない。それは、きっと「しない」のではなく、「できない」のだろうが、その点を無視したまま「人質 23 名全員解放！」と喜びを爆発させる本作ラストは違和感が強い。なぜなら、ジェホは韓国政府を代表する交渉官として、最も重要な部分をいかにタリバン司令官と直接交渉するの？それが交渉官としての最大の任務だったはずなのだから。それが本作第 4 の欠点だが、以上 4 つの欠点を差し引いても、本作の問題提起性とエンタメ性の高さに拍手！

2023 (令和 5) 年 10 月 24 日記